病院・クリニック訪問

がん治療に積極的に取り組み、
評価を得ている病院やクリニックを紹介します

三浦病院　埼玉県富士見市

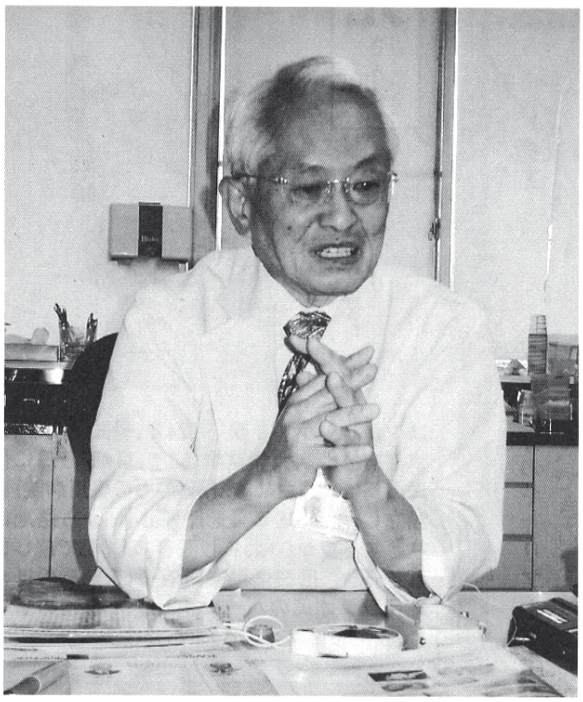
動注化学療法のパイオニア

がんに栄養を運ぶ動脈に直接抗がん剤を注入する『動注化学療法』が日本で初めて行われたのは、1960年代半ばのこと。この療法を日本に導入したのが、三浦病院院長の三浦健医師である。同病院は、手術不可能ながんに対しても果敢に取り組み、大きな成果をあげている。

手術不能のがんでも決してあきらめないで

池袋から東武東上線の準急に乗り、約30分ほどでみずほ台駅に到着。三浦病院はここからタクシーで6～7分のところ、晴れた日には富士山が見えるのどかな田園に位置する。院長の三浦健医師は、知る人ぞ知る『動注化学療法』の第一人者である。

動注化学療法とは、がん細胞に栄養を送っている動脈に細い管を入れて直接抗がん剤を投与するというものだ。がんに的を絞ってピンポイント攻撃するため、副作用はほとんどなく、かつ効果が高い。



院長／三浦　健（みうらつよし）

1930年、広島県呉市生まれ。東京大学医学部卒。医学博士。63～65年フルブライト留学生として渡米。ボストンのレイヒー・クリニックで、ワトキンス博士と共同で「肝動脈内注入化学療法」を開発。帰国後、東大病院助手、半蔵門病院外科部長を経て、90年三浦病院を設立。97年度日本臨床外科学会賞受賞。

「切除不能ながんでもあきらめない。動注化学療法で、できる限りの努力をする」というのが、三浦医師のポリシーだ。

三浦医師は、63年に公費留学生として渡米。留学中、ワトキンス博士のもとで動注ポンプの研究を始めた。ついに臨床に使えるポータブル型のポンプを完成させ、帰国したのは66年。当初のポータブル型ポンプは、体外に取り付けるものだったが、80年には体内埋め込み式の動注ポンプが開発された。

さらに同病院では90年、従来行われてきた、手術で直接局所の動脈にカテーテルを挿入する方法を中止。レントゲン透視下で血管造影しながら、カテーテルをソケイ部（脚の付け根）の動脈から局所の動脈へと誘導し、下腹部の皮下にポートと呼ばれる杯（さかずき）大の薬物注入装置を埋め込む方法へと切り替えた。

手術は局所麻酔で行われ、要する時間は1時間余り。このポートに注射針で抗がん剤を注入する。この方法により、入院期間は2～3週間程度となり大幅に短縮された。退院後は、定期的に通院して抗がん剤をポートに注入すればよい。

この動注化学療法は保険適用となっている。多くの患者が職場や家庭への復帰を果たし、QOL（生活の質）の保持にも大いに役立っている。

一般的に、手術ができない場合は抗がん剤による化学療法が行われるが、「抗がん剤を全身に投与した場合、副作用が強い割に効果が少ない。一方、動注療法では局所に選択的に抗がん剤を注入できるので、がん組織内の抗がん剤濃度は、全身投与法に比べて50～100倍も高くなります。手術できない肝臓がんや膵臓がんも小さくなり、なかには完治したケースもあります」と三浦医師は語る。

たとえば、切除できないケースが

多い肝臓がんの場合をみてみよう。

肝臓がんは、肝動脈ががんの栄養血管となっている。そこで、肝動脈を詰まらせる塞栓術と動注化学療法とを併用すると、約8割の症例に腫瘍マーカーの減少と腫瘍の縮小が認められたという。

大きながんが縮小し命が助かるケースも多い

これまで、三浦医師が40年間に手がけた動注化学療法の症例は、約5000例にものぼる。

90年4月に同病院が開設されてから2003年6月までの13年間の症例数は2927。その内訳をみてみると、原発性肝がん576例、転移性肝がん899例、膵臓がん530例、胆道がん136例、胃がん216例、大腸がん208例、乳がん137例、卵巣・子宮・前立腺がん111例、頭頸部がん96例、肺がん18例となっている。

動注化学療法は、がんの大きさや種類を問わずに行える。なかでも、肝臓がんや頭頸部がん、乳がんなどではたいへん高い効果があるという。

さらに、同病院では温熱療法や放射線治療、冷凍療法なども併用し、集学的に治療を行って延命率の向上を図っている。

がんのなかでも、膵臓がんは治りにくいことで知られる。膵臓は体の奥にある臓器であり、初期には無症状のことが多く、がんを発見しにくいうえに進行が早い。そのため、がんが見つかっても手術できる患者は、約1割程度と言われている。

「膵臓がんは、切除できないケースが多いのですが、その場合には動注化学療法と温熱療法を併用して治療しています」と三浦医師。

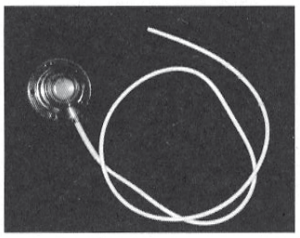
温熱療法は、がん細胞が熱に弱いことを利用した治療法だ。同病院では、家庭用電子レンジと同じ2450メガヘルツの極超短波で、局所加温を行っている。温熱療法の併用により、生存期間が2倍以上も延長するという好成績も得られている。

また、乳がんが再発して手術ができず、放射線治療も不可能という、大学病院やがんセンターでもお手上げだった患者が、動注化学療法を2カ月間続け、大きな腫瘍が驚くほど縮小した例もある。この患者は余命数カ月と言われていたそうだが、動注化学療法で5年間延命した。

このような例は枚挙にいとまがない。

同病院の1日の外来患者数は約150。「動注化学療法は患者さんへの負担が軽く、効果が高い。手術以上の効果が得られるケースも多い」と語る三浦医師だが、それは優れた手術手技があるからだ。

ここでは、院長はじめスタッフが一丸となって、一人でも多くの患者を救おうと、日々奮闘している。



レントゲン下で血管造影を行いながら動注のためのポート（右の写真）を埋め込む。手術時間は50〜60分

天気のいい日には富士山も見える田園地に建つ三浦病院

病院データ

三浦病院

住所／埼玉県富士見市下南畑3166
電話／049-254-7111（代）
ホームページアドレス
http://www.miura-hospital.gr.jp
Eメールアドレス
miura@miura-hospital.gr.jp
外来受付／9:00〜17:00
休診日／土曜・日曜・祝日
診療科目／内科・外科・皮膚科・化学療法
病床数／一般101床（うち個室16床）
●予約制なし、紹介状不要、保険診療